Title	タイルによる通路装飾「ワリー・クロース」について : 集合住宅における近代装飾タイルの一様相
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53199
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

タイルによる通路装飾「ワリー・クロース」について
── 集合住宅(テナメント)における近代装飾タイルの一様相 ──

吉 村 典 子

京都工芸繊維大学大学院
博士後期課程学生

キーワード
Glasgow, Tenements, Decorative Tiles, 1890-1910
グラスゴー，テナメント，装飾タイル，1890-1910

1994. 6 .21受理

はじめに
1. テナメントとワリー・クロース
2. ハインランド地区のワリー・クロース
3. 地方のタイル・デコレーターによるワリー・クロース
おわりに

はじめに

タイルの歴史は文明の暁にまで遡る。その長い歴史の中で，19世紀を中心とする近代イギリスでの展開は，タイルの美的価値を再認識させ，生産技術の革新的開発は，世界をリードする産業をも成立させている。これまでの近代イギリスの装飾タイル研究は，タイルの歴史変遷とともに，文様表現，生産技法，生産業者等を明らかにしてきた[1]。また実際的空間表現としては，著名建築家・デザイナーによるものや，教会，公共建築，大邸宅等の，タイルを主な表現手段とした作例を取り上げ[2]，タイルの美的価値や表現の豊かさを明らかにしている。しかし，近代における装飾タイルの特徴は，こうした特別な場所や一部の唯美主義者の間だけではなく，一般の生活空間（住宅）にも，様々な表現・空間を提供した点にもある。近代装飾タイルの絶頂期は，住宅建設が盛んに行われた時期と一致している。社会・経済的にも力をつけてきた中産階級は，職場とは分離した住まいをもちはじめ，ハウジング・ブームが到来する。中産階級向けの新しい住宅様式が模索される中で，装飾タイルも様々なスタイルで生活空間に取り入れられている。

ヴィクトリア時代に繁栄を極めたグラスゴーとその周辺地域では，都市の住宅スタイルとして「テナメント（Tenement)」と呼ばれる3，4階建てのアパート形式の集合住宅が発達した[3]。テナメントを構成する各住戸へのアクセス方法は，2階以上へは外部に階段を設ける等，

時代や地域によって様々な形式がとられていた。グラスゴーやその周辺地域では，19世紀後半頃から建物の内部に「クロース（close）」と呼ばれる共同通路と階段を設置する形式が中心となり，内部に長く続く通路空間ができあがった。このクロースの壁面は，最初は漆喰にペンキを塗る程度であったが，タイル産業が進展してくる1890年代からタイル装飾が施され，地元の人々の間で「ワリー・クロース（wally close)」と呼ばれるようになった。「ワリー」はスコットランド特有の言葉で「陶器の，陶タイルを並べた」という意味で[4]，全体で「タイルを並べた共同通路」を意味している。この頃から1910年代までの間が，テナメント建設が最も盛んに行われた時代で，同時に様々なタイル装飾がクロースに施された。一棟にクロースは３つから５つあることから，相当数のワリー・クロースがこの地域に存在したことになる。従って，ワリー・クロースは，当時のテナメント住宅を特徴づけると同時に，この地域をも特徴づけるものであったと言える。さらに，このワリー・クロースは「中産階級のテナメントにあって，労働者階級のテナメントにはない」,「ワリー・クロースのあるテナメントに住むことは一種の社会的ステイタスを示す」[5]等と言われており，当時の階級意識をも反映している。本論では，こうした様々な側面をもつワリー・クロースを取り上げ[6]，一般住宅に見られる近代装飾タイルの一状況を提示するとともに，台頭してくる中産階級との関係，さらに，住空間の中での装飾タイルに対する当時の価値・認識についても考察を試みたい。

1.　テナメントとワリー・クロース

テナメントは，国や地域によっては，下層民の安アパートとか，大都市の人口の密集した貧困地帯の集合住宅を意味する場合もある。本論で対象とするグラスゴーとその周辺地域においても，はじめは労働者階級の住宅として，衛生管理や急激な人口増加に対処するために建設されていったものである。しかし，徐々に都市の住宅スタイルとして中産階級にも受け入れられ，19世紀末から20世紀初頭にかけて中産階級向けのテナメント建設が進み，高級テナメントも街の西部，南西部につくられた（図１)。この時期に建てられたテナメントに，本論で対象とするワリー・クロースをみることができる。

図１　テナメント住宅

ワリー・クロースには，基本のスタイルとして両壁面にタイル装飾が施されている。タイル装飾は，152㎜四方の正方形タイルか，75㎜×152㎜の長方形タイルで構成され，壁面の下から160㎝ぐらいの高さまで貼られている。タイル壁面の上部に文様のあるタイルを使って装飾ボーダーを形成し，その他の部分は無地のタイルを使用しているものが多い。そして，タイル壁

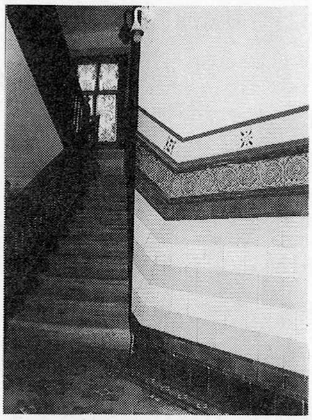

図2　テナメントの通路装飾

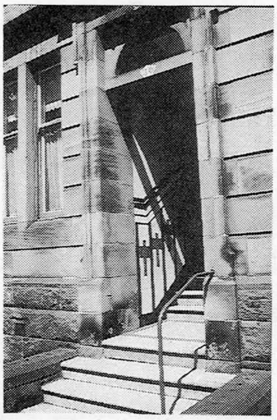

図3　テナメントの入口

図4　ウォルター・クレイン，「ご婦人の応接間」（Clarence Cook, The House Beautiful の口絵より）

面のすぐ上の部分には，ステンシル装飾が壁に施されている場合もある（図2）。また，タイル壁面の最上部には，全体でくり形（モールディング）をつくるような形のタイルがつけられ，壁面装飾によくみられる腰羽目の形式をとっている[7]。タイルの装飾部分は，一枚一文様の単一装飾や，並列することにより連続文様となるもの，数枚で一つの文様を構成するものがある。また，無地で色の異なったタイルが，並べ方によりパターンをつくっているものもある。ワリー・クロースは壁面だけではなく，床にもエンカウスティーク（encaustic）・タイルと呼ばれる象嵌タイルが使われているものもある。タイル以外には，階段の手摺や手摺子装飾，窓や各住戸の玄関のドアにはステンドグラス等が使用され，通路でありながら豊かな空間を作り出している。

壁面の装飾タイルは共同入口から2階まで，高級テナメントでは最上階まで続いている。テナメントの共同入口はこの地域では伝統的にドアがないため[8]，その入口からすぐに続くタイルの彩りを外からも見ることができる（図3）。また，そのタイル壁面は雨の多いこの地方において，降り込む雨から壁の腐敗を防ぎ，汚れも拭き取りやすい特性をもっている。こうした耐水的特性から，タイルはグラスゴーのような大気汚染のひどい工業都市の建築装飾としても推奨されている[9]。そして，通路という広範囲にわたる場所でのタイルの使用は，生産の産業化とそれに伴う低価格化によって可能になったと考えられる。しかし，当時のタイルに対する認識は，こうした実用的特性よりも，特にその装飾的特性に置かれていたようである。当時のテナメントの広告には，間取りや設備の説明とともに「美術タイルのある室内装飾（Art Tiled Interiors）[10]」というような表現が現れ，共同通路に関しても「タイルのある通路（Tiled Closes）[11]」という点が強調されており，タイルがテナメント住宅の一つのアピール・ポイントであったことがわかる。また，タイルに「美術（art）」という言葉がついている点は，タイルが住空間に何か芸術的要素を提供するものと認識されていたことを示しており，

こうした状況は，生活の中に芸術的要素を取り入れていこうとする当時の気運を反映していると言える。

ウィリアム・モリスや彼の思想を継承・発展したアーツ・アンド・クラフツ運動をはじめ，クイーン・アン運動等は，住空間における美的要素の重要性を唱え，こうした気運とともに美術家具，美術陶器等，「美術」や「芸術的」と付く言葉や製品が生活の中に現れてきていた[12]。また，かつては同じ場所にあった職場と生活空間が産業革命後に分離し，「仕事場」が工場，オフィス，店等に移り，「家」は食べる，寝る，子育て，くつろぎ等の生活の場と化していった。そして，住まいとしてどのような「家」を形成するかが問われ，家に対する様々な概念や特性が打ち立てられてきていた。室内装飾に関しては，当時の家具商は「住まいを美しく」をモットー[13]に，様々な室内装飾のサンプルを提示し，ホーム・メイキングに対する関心を高めていた。また，多くの装飾マニュアルやインテリア雑誌も出版され，この時代のテイスト・メイカーとして，美しい住まいづくりのアイデアを掲げていた。タイルに関しても，いくつかの本が言及しており[14]，テイスト・メイカーの第一人者であるチャールズ・イーストレイクも，タイルが「……（一般家庭の）装飾手段となりつつあり（中略），美しさと耐久性と廉価性からも，それに比肩するものはない[15]」と述べている。一方，実際「家」をつくる側として，当時のハウス・メイキングの風潮に最も関心を寄せていたのが家庭の主婦であった[16]。（図４）のウォルター・クレインの挿絵は，当時の唯美主義者の「芸術的」調度品のシンボルであった物品を背景に，そうした主婦を描いたものである。そこには染め付け磁器や日本のうちわとともに，暖炉には装飾タイルが描かれており，タイルが当時の「芸術的」と言われる室内装飾の一つであったことがわかる。こうした時代状況から考えても，タイルが当時模索されていた新しい生活空間を形成するものの一つであり，しかもそれが単なる材料ではなく，芸術的要素を加味するものとしてとられられていたことがわかる。ワリー・クロースのタイルも，質の差こそあれ，同様の認識で採用されたと考えられる。

では次に，当時のワリー・クロースの実際的状況を最もよく示す例の一つとして，中産階級のテナメントが建ち並ぶグラスゴーのハインランド（Hyndland）地区を取り上げてみたい。現在ここは建築保護地区に指定され，取り壊しからも保護されており，グラスゴーの公記録保管所（アーカイヴ）には建築図面も残されている[17]。この地区には，合計161のクロースが存在し，その殆どにタイル装飾が施されている。また，この地区のテナメントの建設期間（1898年−1910年）は，タイル産業の絶頂期とほぼ一致し，現存するワリー・クロースから装飾タイルの最も充実した状況を把握することができる。

2. ハインランド地区におけるワリー・クロース

2-1 ハインランド地区について

ハインランドは，地理的には，グラスゴーのウェスト・エンド（West End）にある。ウェスト・エンドとは，ロンドンの街に象徴されているように，中央より西に位置し，富豪の邸宅や大商店，公園等があり，そこの住人の豊かさを反映している地域である。逆にイースト・エンド（East End）と言えば，下層民街や工業地区になる。こうした地域による社会的差異はグラスゴーにも同じように存在していた。グラスゴーは，ヴィクトリア時代の繁栄とともに，街も西部，南部へと拡張し，住宅地として開発された。拡張する道路沿いにテラス・ハウス（terraced house）が建ち並び，道路から少し奥まった所に戸建住宅（detached house）や二戸連続住宅（semi-detached house）が点在し，緑豊かな公園も見られる。こうした郊外に向けての住宅開発は，仕事場と環境の異なる静かな土地に「家」をもつという当時の中産階級の理想が映し出されている。グラスゴーのウェスト・エンドはその典型的な場所である。

ハインランドのテナメント開発は，中産階級向けとして建設されたが，そのランクは高級に位置づけることができる。それは前述の立地場所からの判断の他に，建築図面に記載されているサインを調べてみると，当時多くの高級テナメントを手掛けた建築家ジョン・キャンベル・マックケラー（John Cambell MacKellar）の事務所[18]が，この地区のテナメント38棟のうち21棟をデザインしているからである。さらに，図面から各住戸の間取りをみてみると，応接間，ダイニング・ルーム，客間（パーラー），２～３のベッド・ルームとなっており，当時最高級と言われたテナメントの間取りとほぼ一致し，広告にはこれらのテナメントを「ハイ・クラス」として売り出している[19]。また，台所には召使いの部屋も設けられており，20世紀初頭までには召使いを雇う傾向はなくなりつつあったが[20]，19世紀中頃は平均的中産階級は召使いを雇っていたこと[21]から，ここの住人は中層以上の中産階級と推測することができる。

2-2 ハインランドのワリー・クロースの全体的状況

クロースの壁面は，この地区の全クロース161のうち約90％がタイル装飾であった（一部木製パネルの壁となっているものがあった)。そのタイル壁面が何階まで続くかを調べてみると，65％が２階まで，29％が最上階まで，そして６％が１階だけという結果が出た。最上階まで続くものの立地場所を調べてみると，商店等が建ち並ぶメイン・ストリートに最も近い便利な場所，あるいは，この地区の地理的中心にあり，ローン・ボーリング（芝生の上で木球をころがす球技）場の豊かな芝の眺めや公園の緑を臨むことのできる場所である。また，それらの間取りは，応接間，ダイニング・ルーム，客間（パーラー），２～３のベッド・ルーム，食器洗い場と召使いの部屋のある台所，というようにかなり広くなっている。一方，タイル壁面が１階

のみのテナメントは，鉄道線路沿いに建ち並び，この辺りは，騒音，大気汚染等があり，他に比べて決して良い条件とは言えない場所である。間取りも，客間，ベッド・ルーム１，ベッド付台所で，前者と比べて狭くなっている。従って，ワリー・クロースのタイル壁面の範囲は，テナメントの質の差異も暗示していると言える。

使われているタイルは，ハインランドをはじめこの地域の殆どが，スタッフォード州やシュロップ州に代表される中部イングランドの窯業地で生産されたものであった。表面の装飾のみこの地域で施されたものも一部存在しているが，少なくとも素地に関してはグラスゴー以外の地域で生産されていたことは確実である。グラスゴーのタイルの生産地については，稿を改めることにしたい。

2-3 タイルの装飾技法

ワリー・クロースで使われているタイルは，粉末状の粘土をプレス機にかけて圧縮してつくる粉末圧縮法（1840年頃開発）によって成型されたものである。釉薬はマジョリカ釉と呼ばれる透明色鉛釉が使用されている。マジョリカ釉は，1850年頃製陶会社ミントンによって開発されたものである。技法は全く異なるが，イタリアのマヨリカ陶器を手本としたため，マジョリカという商品名が付いた[22]。はじめはミントンの商品名であったこのマジョリカという言葉は，やがて透明色鉛釉をさす言葉として広く使われるようになった。このマジョリカ釉の開発により，タイルの光沢と色彩感が増し，近代のタイルの装飾性をより豊かなものにさせたと言える[23]。このマジョリカ釉の中で，ワリー・クロースの無地のタイルには，緑系のものが圧倒的に多い。世紀転換期の装飾芸術に緑色が多く使われていたことは，これまでも指摘されている[24]。ドイツの建築家・デザイナー，ヘルマン・ムテジウスも『イギリスの建築』の中で，イギリスのタイル装飾の緑色について，他の物と調和しやすい点をあげている[25]。また，前掲の

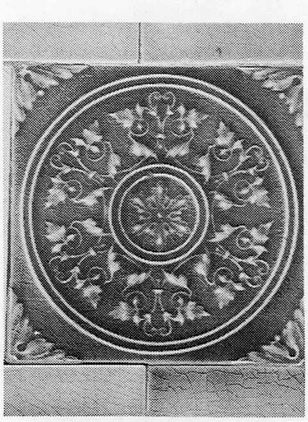

図５　浮き彫りタイル

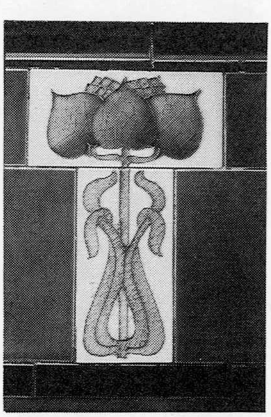

図６
チューブ・ラインド・タイル

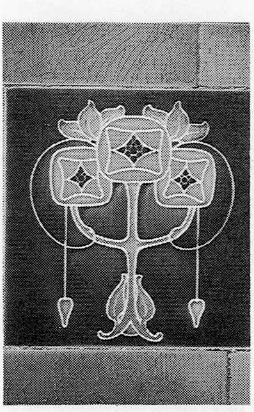

図７　チューブ・ラインの技法を
機械化したタイル

イーストレイクも調和性のある色として緑や茶系の色をあげている[26]。ワリー・クロースの緑色の無地のタイルは，文様のあるタイルと調和しやすく，また，華やかな文様タイルとともに使っても，住空間として落ち着きを保つことができるため，多く採用されたと考えられる。

文様表現の技法としては，（図５）のような押し型により，浮き出し模様をつくる浮き彫りタイル（embossed tile, relief pressed tile）がある。これは成型段階で，プレス機の片側に浮き彫りを形成する文様が彫り込まれており，成型と同時に文様も形成されるものである。こうした浮き彫りタイルの殆どは，一色のマジョリカ釉で仕上げられているが，レリーフ装飾の凹部に釉薬が溜ることにより，一色でありながら濃淡の変化が生じている。他には，手仕事による装飾タイルも観察できる。その一つが，チューブの細い先端から粘土を絞り出して文様の輪郭を描くチューブ・ラインド・タイル（tube-lined tile）である（図６）。この技法は手工芸的要素をもち，アーツ・アンド・クラフツ運動の思想を背景に，19世紀末頃から陶器の装飾技法として流行したものである。しかし，この技法は手間がかかったので，これを機械化したタイルも生産されるようになった。それは，文様の輪郭を陰刻した型にタイル素地をプレスして，チューブから搾り出してできるような堆線を作るものである（図７）。これは機械プレスにより画一的な堆線が形成されるものの，チューブ搾りの搾り加減等による太さの違いや，手仕事による柔らかみのある線は表れていない。しかし，手描きであれ，機械プレスであれ，これらのタイル装飾は，堆線により文様に区画ができ，その区画により，隣りの釉薬が混ざり合わないため，一枚のタイルに複数の色釉を使うことができる。従って，浮き彫りタイルの濃淡効果と違って，多色の色彩効果を出している。他に，この時代に人気があった技法として転写印刷があるが，それによる装飾タイルはワリー・クロースには見ることができなかった。これは，静止よりも歩行等の運動が中心になる通路という空間において，移動しながら視界に入るものは，転写印刷タイル等の繊細な文様表現よりも，はっきりとした輪郭の凹凸のある装飾タイルが適していると考えられ，この点は通路におけるタイル装飾の特性としてあげておきたい。

2-4 文様のモチーフ

文様のモチーフは，ゴシック調のものや，中世を思わせるガリオン船，唐草文様，そしてクラシック調のもの等の過去の歴史文様を応用したものがあるが，文様の中でも大半をしめているものは，植物をモチーフとした文様である。19世紀は，人々の自然に対する関心が高まった時代であった[27]。そして，新しいデザインの源泉としても「植物」が取り上げられ[28]，それをどのように装飾として表現していくかについて論じられた時代でもあった。19世紀後半から各地で設立したデザイン学校も，過去の歴史文様の研究とともに，自然（植物）研究に重点が置かれていた[29]。また，植物は当時の新しい装飾デザインの霊感源であっただけでなく，壁面装

飾としても，採用されやすいものであった点があげられる。モリスは植物を題材にした平面装飾を最も得意としたデザイナーであったが，彼は壁面装飾論の中で，壁面装飾は「一般の人々が発展させせることができるイマジネーションを伴うのにあまり難しいものであってはならない[30]。」，「何か我々が受け入れることのできるもの[31]」であるべきことを述べている。公共建築やオフィスが歴史装飾で威厳を示していたことに対し，「家」へと導くワリー・クロースの装飾は，「植物」をモチーフとしたものが受け入れやすく，それは，精神的緊張感をほぐす「家」のイメージと深い関わり合いがあるものと考えられる。この関係に関しては今後も探求したい点であるが，本稿では住居の装飾に植物文様が圧倒的に多かった点を強調するにとどめておきたい。

2-5 装飾デザイン的変遷

この地区のワリー・クロースの装飾デザイン的変遷は，テナメントが建てられた順にワリー・クロースを観察することにより把握することができる。最初に建てられた棟（1898年）のクロースのタイルの文様は，ゴシック調のものや唐草文様が目立つ（図8）。そして一枚一色のマジョリカ釉による浮き彫りタイルが殆どであった。色は，褐色，茶，緑，トルコブルーが主である。他のクロース装飾は，床のエンカウスティーク・タイル，階段の大理石の平板，木彫り装飾を施した階段の欄干，そして踊り場のステンドグラスの窓等，非常に重厚な趣をみせている。この時期のワリー・クロースは，タイルをはじめ，他のインテリア装飾もゴシック・スタイルを基調としているものが多いが，所々古典調のモチーフも見られ，ヴィクトリア朝特有の折衷的要素が観察できる。

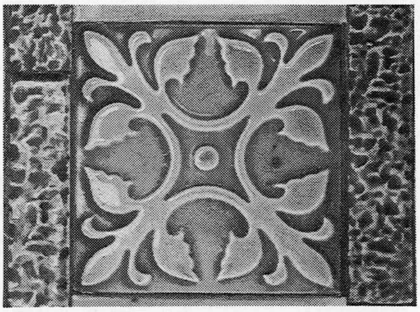
図８　ゴシック調のタイル

新世紀を迎え，1902，３年頃になると，ワリー・クロースは，初期の重厚な趣と打って変わって，明るく，派手やかなものが目立ってくる。（図９）は，1902年頃のものであるが，タイルの種類は最も多く，色のヴァリエーションは，前に挙げた色に加えて，水色，オレンジ，黄色，ピンクが現れ，タイル壁面の高さも最大値をマークしている。そして，床のタイルの色数も多く，複雑なパターンを形成している。これはタイル産業が，技術，装飾表現とも充実した状況が表れているものと言える。また，採用する方も，新世紀の到来とともに，次々と新しい装飾を躊躇することなく受け入れていったようである。しかし，それらのいくつかは，華やかな感じはあるが，装飾効果の高いものを貼集めたという印象も与えている[32]。また，この時期になると，（図10）に見られるようなパネル形式の装飾タイルが現れてくる。これはタイル４，

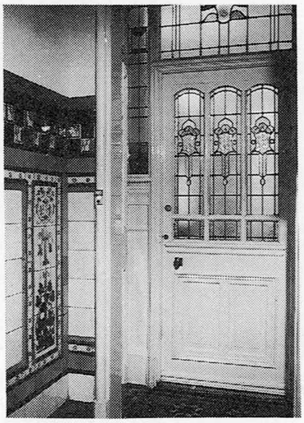

図9　クロース装飾（1902年頃）

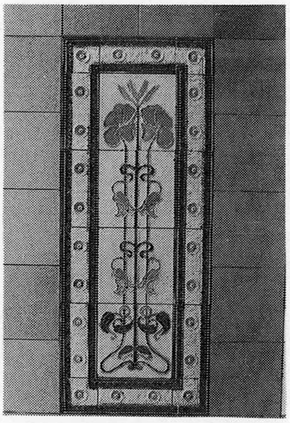

図10　パネル形式の装飾タイル

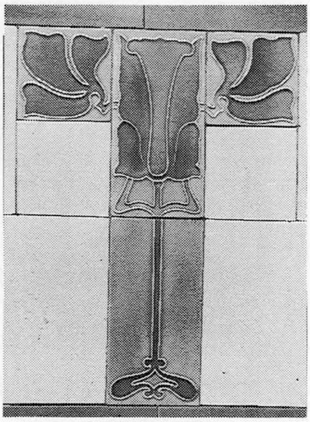

図11　T字型タイル

5枚で一つの文様を構成し，装飾ボーダーの下の通常は無地の部分に等間隔にはめ込んでいくものである。従ってタイル壁面の文様装飾面積が増えている。また，文様表現として植物のアール・ヌーヴォー調の文様が現れはじめている。一般にアール・ヌーヴォー調の文様は，装飾タイルにおいては1897年頃から現れはじめ，20世紀に入った頃から特に人気が出てきたと言われている[33)]。ハインランドのワリー・クロースでは，1902年頃から現れている。そしてその特徴は，植物の花の部分というよりも，葉や茎の変形と言える。（図10）のように直線の中に，大胆な茎のカーヴを取り入れ，文様のアクセントをつけている。この時期からアール・ヌーヴォー調の文様がハインランドでも主流となり，1904，5年には，（図11）のようなT字型のスタイルで，かなり抽象化されたデザインが現れてくる。正方形タイルを基本とする中で，こうしたT字型をはじめ，縦長の装飾タイルが多い点もこの時期の特徴である。また，技法としては，チューブ・ラインによる装飾やそれを模した機械プレスによる装飾が中心となってきている。従ってそれにより色彩感も増している。

1906年頃からは，グラスゴー派の薔薇装飾を想起させる装飾タイル（図12）が盛んに採用されている。グラスゴー派はC. R. マッキントッシュや彼を含む4人組（The Four）を筆頭に，19世紀末頃から前衛的な活動を展開していた。そして彼らの活動は，1901年にグラスゴーで行われた万国博覧会をはじめ，グラスゴー派のデザインによるミセス・クランストン（Catherine Cranston）のいくつかのティー・ルームを通して，徐々に民衆にも知られるようになった[34)]。また，グラスゴー派の代表的デザイナーが所属する家具製造会社ワイリー・アンド・ロヘッド（Wylie & Lochead）は，彼らのデザインによる中産階級向けの家具を売り出し，カタログも流布していた。グラスゴー派の装飾デザインの中で，薔薇は様々な作品に現れ，「グラスゴー・ローズ」という名も付けられている[35)]。（図12）のタイルの文様がグラスゴー・ローズを思わせる所以は，花の輪郭が円や四角を変形した形態をもち，その内側を分割して花弁

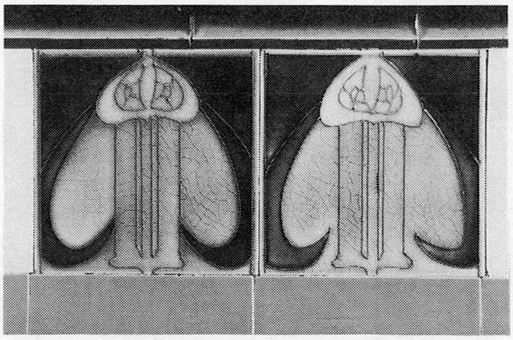

図12　薔薇文様のあるタイル（1906年頃）

図13　テナメントの室内装飾

とする文様表現や，茎の直線的処理，そして，少し薄味がかったピンク等の色彩は，グラスゴー派の作品に頻繁に用いられている表現であるからである。また，こうしたタイルが使われている時期のテナメントの室内装飾をみると，つくり付け食器棚には，四角のくり抜き装飾，暖炉には，最上部の突出したコーニス状の装飾や左右の固定座席が観察でき（図13），グラスゴー派の家具デザインの特徴と呼応する[36)]。従って，（図12）のタイルデザインも，グラスゴー派の薔薇装飾との関連を考えることは可能であるし，直接的に関与していなくとも，グラスゴー派のスタイルやそれに類似したものが一般にも取り入れられている状況は確認できる。テナメントは当時の新しい住宅スタイルであり，中産階級の新しい生活像が現れているところでもある。そういったところに前衛デザインが反映されていることは，当時の状況として特筆すべき点である。

一方，クロース全体の装飾をみていくと，テナメント建設の最終段階に進むにつれて，1902，3年頃の過剰性はおさまっていることに気づく。具体的には，床のタイルは消え，テッセレーションと呼ばれている小石をちりばめたような床，あるいは，単純にコンクリート仕上げの床となっている。1910年頃には，階段の手摺子装飾も，多くが鋳鉄による単純なデザインのものとなっている。こうした過剰な装飾がおさまっていく傾向は，新世紀に向けてのイギリス全体の風潮でもあり，同時代の著名デザイナーの作品をはじめ，当時最も影響力のあった雑誌『ステューディオ』の論評を通しても，シンプルなデザインを推奨していく動きが観察できる[37)]。しかし，ワリー・クロースにみられる装飾表現の変化は，こうした風潮の表れというよりも，経済不況や住宅スタイルの変化によるものと考えられる。グラスゴーのハイクラス・テナメントは，不況のあおりを受けその建設を1910年代に休止している。また，この地区の開発を手掛けた一人であるジョン・マックタガート（John Mactaggart）も，開発内容をコテジ・タイプの住宅建設に移行していた[38)]。ワリー・クロースの装飾は，こうした状況の反映とともに，テナメント建設の黄金時代の終わりも暗示している。

以上のような点が，ハインランド地区のワリー・クロースの状況であり，類似した点は他の地区の中産階級のテナメントにも観察できる。そうした中で，これまでのものとは異なった様相を示すワリー・クロースがグラスゴー近郊のグリノック（Greenock）に存在していた。そこには，確実にこの地方で表面装飾が施されたタイルによるワリー・クロースが観察できる。それを最後に取り上げ，ハインランドに見られたような状況と比較し，それの意味するところも考えてみたい。

3. 地方のタイル・デコレーターによるワリー・クロース

グリノックは，クライド（Clyde）河口の南岸に位置する街である。クライド川はグラスゴーをはじめ西部スコットランドの繁栄に欠かせないもので，この河口には，造船をはじめとする工場が建ち並び，商業においては国内外の玄関口でもあった。クライド川は，グラスゴーの栄華を象徴するものであり，その沿岸に位置するクリノックも，ヴィクトリア時代，造船業を中心に栄えた街である。この街は，労働者の多いところであったが，街のウェスト・エンドには，豪邸も点在しており，豊かなタイル装飾をもつテナメントも多く見られる。そうした地区に，クライド河口を臨むようなかたちで，テナメントがいくつか建ち並んでいる。その内の2棟の4つのワリー・クロースは，これまで取り上げてきたものとは異なった様相を呈している。ワリー・クロースの基本構成は同じであるが，タイルの装飾部分には，まさにそこから眺めることのできるクライド河口の風景が描かれている（図14，15)。

タイル壁面は入口から最上階まで続き，それによって形成される帯状に続く装飾ボーダーに，川の風景が延々と表現されている。装飾技法は，チューブ・ラインと絵付け装飾の組合せである。つまりすべて手仕事である。タイルに描かれているような風景を現在も実際に見ることができ，細かいスケッチに基づき製作していたことがわかる。描かれている長く続く川の風景は，帯状に続くタイルボーダーに適したモチーフであり，ワリー・クロースの特性と装飾モチーフ

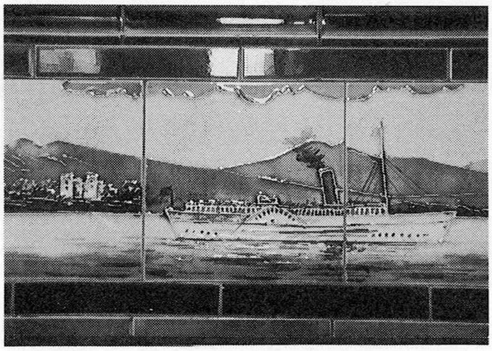

図14 ダンカンによる装飾タイル

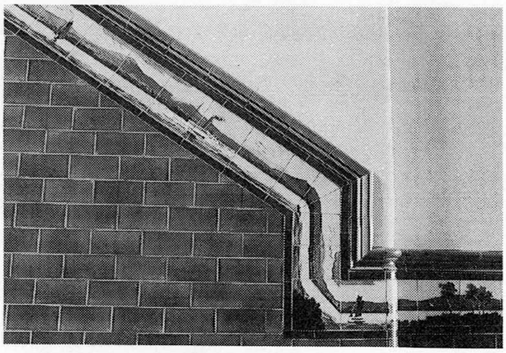

図15 ダンカンによる装飾タイル

の特性とをうまく融合させている。さらに，装飾はタイルボーダーの構造に従って施されている。(図15) に見られるように，複雑なカーヴにも，風景の連続性を破壊することなく表現されている。こうした点は，他のテナメントのタイル装飾には見ることができない要素である。他のテナメントのタイルは，生産（装飾）段階では，そのタイルがどこに貼られるかはわからない。一方，ここに見られるタイル装飾は，貼られる場所のプランに基づいて施されている。

これらのワリー・クロースは，グラスゴーのタイル業者ジェームズ・ダンカン・カンパニー（以下ダンカンとする）によって，1900年頃制作・施工されたものである[39]。ダンカンは，タイル販売・施工，そして中部イングランドの大手タイル製造会社の代理店として，早い時期からグラスゴーを中心に活動していた。この会社は代理店としての機能を活かして，素地だけのものを購入し，独自のデザインで装飾していくデコレーターとしての仕事もしていた[40]。グリノックのワリー・クロースには，ダンカン独自の装飾デザインであるという証として，装飾面の端に“J. DUNCAN LTD. GLASGOW”とチューブ搾りの技法でサインを入れている。前述のように，グラスゴーやその周辺地域はタイルの需要は相当高かったにもかかわらず，グラスゴーでは生産されておらず，殆どが中部イングランド製のものであった。これまで取り上げてきたタイルの状況からも明かなように，そのヴァリエーションに富んだ表現とスケールの大きさは，中部イングランドのタイル産業の進展ぶりと優れた生産力を示している。しかし，そうしたタイルが大量に，そして確実に普及してくると，今度はダンカンのワリー・クロースのように，差異性を求めた表現が現れてきている。タイルの差異性とは，主にその表面装飾に起因するわけで，タイルの生産過程を全面的に独自のものにする必要はない。従って，タイルの素地生産に対しては中部イングランドの卓越した技術と生産力に依存し，装飾をオリジナルとするダンカンのような仕事が浮かび上がってくる。ハインランドに見られたような状況が，装飾タイルの確実な普及を物語るものであるならば，ダンカンの行ったワリー・クロースのタイル装飾は，何か差異性を出していこうする動きのあらわれと言えるであろう。そこにおいては，当時量産のタイルが大半をしめる中で，量産では表現しきれない繊細な手仕事の妙を発揮し，同じ文様を繰り返し並列するのではなく，入口から最上階までで一つの情景を表し，さらにその情景がこの地域の住民の誰もが認識できるものが表現されている。こうした状況は，近代装飾タイルの絶頂期のもう一つの様相を表しており，かつ，装飾タイルが普及し，装飾も何かありふれたものになっていく中で，タイルの特性の一つである装飾的価値を再認識させるものである。

おわりに

以上，一般住宅における装飾タイルの一例であるワリー・クロースを取り上げてきた。その

中で，装飾タイルに関するイギリス近代の特徴は，それが「艶」と「多色」の世界を提供した点にある。特に色鉛釉の開発によって生まれたマジョリカ・タイルは，その世界の構築に重要な位置をしめるものであった。こうした効果をもつタイルは，暗くどんよりとした西部スコットランドの天候に，一層暗くなるテナメントの通路を，壁面保護とともに，明るく彩っていた。また，装飾タイルの絶頂期には，ダンカンのような差異性を出していく表現も現れ，そこにはこの地域のアイデンティティーを盛り込んでいこうとする動きもみられた。

本論で対象としたワリー・クロースのようなタイル装飾の現れは，流行や時代の豊さ，また，タイル産業の進展を物語るだけではなく，通路という共同の空間においても彩っていこうとする，この時代の装飾への関心を示している。その中のいくつかの表現は，装飾スタイルがばらばらであったり，単なる貼り集めといった要素も観察できた。しかし，かつては貧相であった空間に装飾的なものを取り入れていった点は，豊かな住環境づくりの高まりと，家の中にも「芸術的」要素をもり込んでいこうとするこの時代の気運を示している。そしてその中で使われているタイルは，実用目的以上のものを意味し，その装飾的特性に価値が置かれていたと言える。また，当時のこうした「芸術的」要素は社会的スノッビズムも含んでいる[41)]。タイルに関しては「中産階級のテナメントにはワリー・クロースがある」という言伝えが，それを象徴している。

近代装飾タイルは，タイルによる表現の可能性を広げるとともに，住宅の中でのそれは，豊かな住空間を表現する一手段でもあった。タイルの耐久性と退色しないという特性は，時代の刻印となって，その様子を現代の我々に伝えている。そして，本論で対象としたワリー・クロースは，今でもテナメントの通路を彩るものとして存在し，現代の生活の一風景をつくりだしている。

註

1）D. S. Skinner & Hans van Lemmen ed., *Minton Tiles 1835-1935*, Stoke-on-Trent, 1984.
J. and B. Austwick, *The Decorative Tile*, London, 1980.
Hans van Lemmen, *Victorian Tiles*, London, 1980. 等。

2）Barnard Julian, *Victorian Ceramic Tiles*, London, 1979. や
Micheal Stratton, “Decorative Tiles for Churches and Public Buildings”, *The Decorative Arts in the Victorian Period*, London, 1989. 等。

3）テナメントは賃貸形式の住宅である（1851年一般賃貸住宅法，労働者賃貸住宅法制定）。テナメント建設を進めていったのは，シティー・カウンシルから民間の開発業者までと様々である。テナメントに関してはFrank Worsdall, *The Glasgow Tenement*, Glasgow, 1989. を参考にした。

4）J. Arnold Fleming, *Scottish Pottery*, Glasgow, 1923, p. 24.

5）M. A. Simpson & T. H. Lloyd, *Middle Class Housing in Britain*, London, 1971, p. 74.
Edward Boyd, *Glasgow*, Glasgow, 1981, p. 88.

6）これまでワリー・クロースに関しては，Jane Whitehall, Ron Hill らが写真による展覧会を開いている。

7）腰羽目の部分には，公共建築では大理石，住宅の室内では木や壁紙を使う場合が多い。

8) Worsdall, p. 32.
9) Tessa Paul, *Tiles for Beautiful Home*, London, 1989, p. 62.
10) *The Glasgow Herald*, 6 January 1908. (Worsdall, p. 123.)
11) *The Evening Times*, 25 February. 1895 (Worsdall, p. 109.)
12) ワット社は1877年にカタログ『美術家具』を出版し，美術家具商連盟等が1880年に開店している。また，ミントン，ドルトン等の製陶会社は70年代に美術陶器部門を開設している。
13) Mark Girouard, "The House Beautiful," *Sweetness & Light The 'Queen Ann' Movement 1860-1900*, London, pp. 130-138.
14) Robert W. Edis, *Decoration and Furniture of Town Houses*, London, 1881, p. 40.
15) Charles L. Eastlake, *Hints on Household Taste*, London, 1868, p. 50.
16) Adrian Forty, "The Home," *Objects of Desire*, London, 1986, pp. 94-119.
17) Plans of Tenements in the Hyndland area（ストラスクライド公記録保管所保管）
18) Wordsdall, p. 59.
19) Ibid., p. 32.
20) モリー・ハリスン（小林祐子訳），『台所の文化史』，法政大学出版局，1993，p. 242.
21) J. P. ブラウン（松村昌家訳），『19世紀イギリスの小説と社会事情』，英宝社，1987, p. 44.
22) イギリスのマジョリカは，素地の浮き彫り状の装飾等に発色効果のある鉛釉をかけ焼成し，色彩感をだす。一方イタリアのマヨリカは，胎土に錫白釉をかけて白い素地をつくり，その上に絵付けをしていくものである。書物によっては前者を Majolica，後者の Maiolica と綴りにより意味を分けているものもある。本稿では，それぞれの国の発音に基づき前者をマジョリカ，後者をマヨリカと表記する。
23) イーストレイクも前掲書の中で，マジョリカ釉の色の美しさについて言及している。p. 225.
24) Philippe Garner, *The World of Edwardiana*, London, 1974, p. 11.
25) Hermann Muthesius, *Das Englishe Haus*, Berlin, 1904.（英訳出版 1979, p. 184.）
26) Eastlake, p. 43.
27) 18世紀後半からのロマン主義の高揚，リンネやラマルクらの自然に対する科学的アプローチ，また，18，19世紀に黄金期を迎える博物学等を背景に，一般にも植物採集や家庭での園芸がブームとなっている（John Steegman, *Victorian Taste*, London, 1987, p. 313.）。
28) Owen Jones, *The Grammer of Ornament*, London, 1856. の第20章はそれを象徴している。
29) "Ceramic Work of The Burslem Art School", *The Studio*, 1904. この記事には，デザイン学校のそうした状況が記されている。
30) William Morris, *Some Hints on Pattern Designing, London*, 1899, pp. 4-5.
31) Ibid., pp. 6-7.
32) 前掲の（註 6）の Whitehall はワリー・クロースの写真取材の中で，「ハイクラスのテナメントにかえって装飾構成のひどいワリー・クロースが存在していた。」というコメントを残している。
33) Austwick, p. 116.
34) Perilla & Juliet Kinchin, *Glasgow's Great Exhibitions 1888, 1901, 1911, 1938, 1988*, Bicester, 1989, pp. 67-68.
35) Jude Burkhauser ed., '*Glasgow Girls*', Edinburgh, 1990, pp. 102-105.
36) Muthesius, pp. 187-188. ムテジウスは，こうしたタイプの暖炉をデザインした当時の建築家としてグラスゴー派の C. R. マッキントッシュや G. ワルトンの名をあげている。また，イングランドでは「コージー・コーナー」として流行になっていたことも記している。
37) "The Lay Figure at Home" Dec. 1896, p.266, "The Lay Figure" Dec. 1899, p.228, "On Modern Architecuture & Decorative Design" Oct. 1900, p. 284. 等
38) 戦後，彼は田園都市開発に頭角を現していく。Worsdall, p. 123.
39) 活動期間は1865-1966年である（*Post Office Glasgow Directories*）。
40) チューブ・ラインド・タイルのように，輸送中に装飾部分が破損しやすいものは，こうした業者が各地で装飾していた可能性も考えられる。
41) イーストレイクは前掲書の中で，「アート」という要素のために何倍ものお金を費やす非現実性について非難している。p. 91.

※本稿は，意匠学会理論分科会（1993年10月23日）で口頭発表した「グラスゴーの共同住宅（テナメント）におけるヴィクトリアン・タイル」を加筆，訂正したものである。